



## AIエッジコンピューティングの 可能性を拓く。

OKI  
情報通信事業本部  
IoTプラットフォーム事業部  
スマートコミュニケーションシステム部  
島田 貴光

### 半年で AI エッジコンピューター「AE2100」を商品化

私は、長年、複合機の制御系ソフトウェア開発に携わっていました。丁度、世間ではインターネットを活用した多彩なサービスやビジネスが賑わいを見せはじめていた頃です。この時、私は、多数のデバイスがネットワークに繋がることに可能性を感じ、その最前線で力を試したいという思いに駆られました。そこで、当時「ネットワークソリューション」を掲げていたOKIに入社しました。

入社の際、志望したのは、よりユーザーに近いSE職。希望通り、当時OKIが業界をリードしていたVoIP関連部署に配属となり、ネットワーク系のSE業務に携わっていました。その後、IP-PBXのサポートシステムなどの担当を経て、2012年には、920MHz帯マルチホップ無線のビジネス立ち上げに伴い、現部署の前身である「新事業推進室」に異動。センサーネットワークを容易に構築する920MHz帯マルチホップ無線「SmartHop<sup>®</sup>」の無線ユニットや海外対応の無線通信モジュール製品の商品企画や販売戦略など、マーケティング全般を担当していました。

そして、2019年3月には、SmartHopと同じIoT領域であり、センサーネットワークの高度化、AI化を推進するAIエッジコンピューターの商品化プロジェクトが始動し、プロダクトマネージャーとして参画しました。

ご承知の通り、近年、ディープラーニングをはじめとするAI技術は急速な進化を遂げ、特にIoT領域での活用が進みつつあります。しかし、IoTデバイスの多様化、高度化や、扱うデータ量の増加により、ネットワークやクラウド側の負荷が増え続けると同時に、セキュリティのリスクも増加傾向にあるのも事実です。私たちが手掛けたAIエッジコンピューターは、従来クラウド側で行っていたAI処理を、IoTデバイスに近いエッジ側で実行することができます。これにより、製造現場などで必要とされるリアルタイム性の確保や、通信やクラウドの負荷を低減できます。また、映像監視などに活用する場合、カメラに写り込んだ人物映像などはクラウド側に送信されず、解析結果のみを送信するためプライバシー保護にも対応します。商品コンセプトとして、

エッジ側でAI処理を行うハードウェア/ソフトウェアのプラットフォームを提供し、AIベンダーやSlerといったパートナーがAE2100を活用しやすくするため、あえて汎用性にこだわっています。

商品化に際しては、事業部横断型のプロジェクトであり、なおかつ商品化まで6ヶ月余りというタイトなスケジュールであったため、社内各部署の協力を得て、調整しながら進める必要がありました。また、商品化を進める上で最もポイントとなったのは、社外パートナーとのエコシステムの構築でした。IoTとAIの統合という新しい市場分野の商品であったため、当初はお客様に受け入れられるか不安を抱きながらのスタートでしたが、積極的なマーケティングやパートナー開拓を進めてきた結果、最終的には、AIベンダー、Sler、販売会社など約30社のパートナーにご賛同いただきました。そして、当初の計画通り、2019年10月に多くのパートナーに参加頂いて商品発表会を開催できました。これも、パートナーをはじめ関係各所の献身的なご協力の賜物と深く感謝しています。実際、これまであまり接することもなかったAI系のベンチャー企業の若い経営者や技術者の方々とお話する機会も多く、私自身、新たな発見や刺激を得ることができました。

販売戦略の一環として、評価を目的として「AE2100」を無償提供するモニターキャンペーンを実施し、さらに、その結果を持ち寄ってAIエッジコンテストの開催を予定しています。

ユースケースとしては、必要とされる、製造設備の異常監視や交通状況の監視、社会インフラのモニタリング、店舗管理・来店顧客の客層分析、製品の品質・出荷検査などへの適用を想定していますが、「SmartHop」がそうであったように、お客様の課題を解決する想定外の用途にも活用されるのではと考えています。そして、今後もパートナーとの共創を強化し、Win-Winの関係を構築すると同時に、「AE2100」とAI技術を融合し、OKIならではの強みを生かしたAIエッジ・ソリューションを提供することで、社会に貢献したいと考えています。